

令和元年6月3日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02554

研究課題名(和文) ルーマニアのドイツ語話者諸集団のアイデンティティ形成とドイツ古典主義文学受容

研究課題名(英文) Identity Formation of German-speaking Groups in Romania and their Acceptance of the Literature of the German Classicism

研究代表者

藤田 恭子 (FUJITA, Kyoko)

東北大学・国際文化研究科・教授

研究者番号：80241561

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、第一次大戦後にマイノリティとなったルーマニアのドイツ語話者によるドイツ古典主義文学受容を検証し、その受容が彼らのアイデンティティ形成に果たした役割を解明した。ドイツ語話者の特性は地域ごとに異なり、ブコヴィナではユダヤ系が、トランシルヴァニアではプロテスタントのドイツ系が多い。両者は第二次大戦中にホロコーストの被害者と加害者ともなった。前者にとりゲーテは普遍的人間性を示す「真のドイツ文化」の象徴であり、ナチズムの対極にあるものとしてアイデンティティを支えた。他方、後者におけるシラーへの盛んな崇敬はドイツ民族としてのアイデンティティの紐帯という政治的意義を帯びていたことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ドイツやオーストリアでのドイツ古典主義文学受容については、手厚い先行研究があるが、国外のドイツ語話者マイノリティに着目し教育等にも目配りした研究は管見の限り見当らなかった。他方、ルーマニアのドイツ語話者マイノリティ研究では古典主義文学受容に関わる包括的で学際的研究はなかった。本研究は、マイノリティ集団のアイデンティティ形成における文学の機能を検証し、マイノリティ文化の視座からドイツ古典主義文学受容に新たな照射を行うことで、文学研究およびマイノリティ研究双方に寄与することができた。研究の過程で、書籍化やデジタル化されていない重要な資料も発掘し、内容紹介が可能となった。

研究成果の概要(英文)： This study examined the acceptance of two excellent poets of German Classicism, Johann Wolfgang von Goethe and Friedrich von Schiller, by German speakers in Romania who fell into ethnic minorities after World War I, and elucidated what roles its acceptance played in the formation of their identities. The characteristics of German speakers in Romania differed from region to region. Many of them in Bukovina were from Jewish backgrounds, but the most of them in Transylvania were German Protestants. They were also victims and perpetrators of the Holocaust during World War II.

For the former, Goethe was a symbol of the "true German culture", which showed universal humanity, and meant the opposite of Nazism. For them, Goethe was the opposite of Nazism, and played a key role for their identity as legitimate members of German culture. On the other hand, the special reverence in the latter for Schiller had political significance as a link to the identity as a German ethnic group.

研究分野：ドイツ語圏文化・文学研究

キーワード：ナショナリズム 普遍 ユダヤ ゲーテ シラー 多文化共生 マイノリティ ナチズム

1. 研究開始当初の背景

ルーマニアのドイツ語話者に関する研究が、歴史学を中心に批判的学術研究として展開したのは2000年代以降である。最大のタブーであったがゆえに現在もっとも熱心に取り組まれているのは、ドイツ系住民のナチズム受容であり、文学研究の分野でも取り組みが始まった。しかし、ナチズム受容の素地を形成した19世紀後半以降の彼らのアイデンティティ形成と文学との関わりを取り上げた研究は見当たらなかった。またドイツ系住民による地域文学におけるゲーテ受容に関する先行研究はあるが、シラーに着目した研究はなかった。ブコヴィナのユダヤ系ドイツ語文学におけるゲーテやシラーの受容についても包括的研究は見当たらなかった。なお日本国内では、研究代表者(藤田)と研究分担者(鈴木)がこの分野での主たる研究者であり、先行研究はなかった。

研究代表者は、平成9～10年度科学研究費補助金萌芽研究「ルーマニア・ドイツ語文学の歴史と現在」により、日本における研究基盤整備に着手した。その後も研究代表者として3件、研究分担者として10件の科研費研究に参加し、研究を推進してきた。平成26年2月に、科研費研究成果公開促進費により著書『「周縁」のドイツ語文学 ルーマニア領ブコヴィナのユダヤ系ドイツ語詩人たち』を刊行し、第13回日本独文学会賞を受賞した。同書をまとめる過程で、ブコヴィナのユダヤ系ドイツ語話者が第二次世界大戦中の強制移送や収容所からの生還を経て、ドイツ古典主義文学の代表的詩人ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテに連なる者としての自己意識を堅持していた例を複数確認した。また研究代表者と研究分担者は、平成25～27年度科研費基盤研究(C)「ルーマニア・ドイツ語文学にみる二つの『過去の克服』 ナチズムと社会主義独裁」を共同で実施した過程で、トランシルヴァニア(ドイツ名:ズィーベンビュルゲン)におけるドイツ古典主義受容が、ゲーテと並び称されるフリードリヒ・フォン・シラーを中心としていた事情に行き当たり、そこから本研究の構想に至った。

2. 研究の目的

本研究の目的は、第一次世界大戦後にルーマニアのマイノリティとなったユダヤ系およびドイツ系ドイツ語話者によるドイツ古典主義文学受容を解明し、その受容が彼らのアイデンティティ形成に果たした役割を考察することである。ルーマニアのドイツ語話者の特性は地域毎に異なり、ブコヴィナのドイツ語話者はハプスブルク帝国の植民政策およびドイツ化政策によりドイツ語ドイツ文化に同化したユダヤ系が多く、またトランシルヴァニアでは、12世紀に植民した祖先をもつプロテスタントのドイツ系が多い。両者は第二次世界大戦中にホロコーストの被害者と加害者ともなった。そして前者ではゲーテが、普遍的人間性を示す「真のドイツ文化」の代表として、後者ではシラーが、青年の模範となるべき理想主義者として顕彰されていた。19世紀後半から第二次世界大戦まで両地域で展開された教育や文化活動における両詩人の受容を通して、カノンとしての古典主義文学受容の諸相を解明し、マイノリティ集団の自己認識形成における文学の機能を検証することを目指した。

3. 研究の方法

従来携わってきた研究テーマとの親近性に基づき、研究代表者はブコヴィナ、研究分担者はトランシルヴァニアを担当し、以下に記す1)～7)の手順に従い、意見交換を重ねつつ研究を進めた。

- 1) ブコヴィナおよびトランシルヴァニアにおける、19世紀中期から両次大戦間期までの教育や文化活動に関わる史(資)料を収集し、書誌情報等を整理した。
- 2) それぞれの地域で刊行されたドイツ語新聞や文芸誌掲載の記事、評論、作品、並びに劇場の上演プログラムを分析し、ゲーテおよびシラーの受容を地域毎、時代毎に跡付けた。
- 3) ギムナジウムおよびドイツ語を授業言語とする初等学校に関わる史料を分析し、学校教育における両詩人の位置づけを確認した。
- 4) ドイツ語新聞やカレンダーにより、地域共同体内での両詩人に関わる催し物等を確認した。
- 5) 上記2)-4)に関連し、ドイツ語話者のアイデンティティをめぐる言説の有無、および有る場合は内容を確認した。
- 6) 両地域のドイツ語話者集団と施政者(ウィーン、ブダペスト、ブカレスト各政府)との関係を歴史学の研究成果等を踏まえて整理し、5)で確認した言説の背景を理解した。
- 7) ドイツでの両詩人の受容史との、共通点と相違点を確認した。

4. 研究成果

- 1) ウィーンのオーストリア国立図書館およびルーマニア・シビウ市のフリードリヒ・トイチ

ユ・ドイツ文化センター内ルーマニア福音主義教会アウクスブルク信仰告白派中央公文書館兼図書館において、ブコヴィナおよびトランシルヴァニアにおける教育および文化活動に関わる史(資)料を収集し、書誌情報等の整理も行った。オーストリア国立図書館では、ブコヴィナにあった複数のハプスブルク帝国ギムナジウムの年次記録や戦間期に刊行されたドイツ語新聞『日報(Der Tag)』(1932-1935)、さらにトランシルヴァニアで刊行されていたドイツ語新聞『ズィーベンビュルゲン=ドイツ日刊新聞(Siebenbürgisch-Deutsches Tageblatt)』(1874-1944)等の調査をおこなった。後者はデジタル化資料として公開されている部分があるが、シラー受容に関わる重要な年次はデジタル化されておらず、製本された新聞の調査が必要であった。またシビウ市の文書館では、その他のトランシルヴァニアで刊行された新聞や雑誌に加え、トランシルヴァニアで挙行されたシラー祭での記念講演の記録やギムナジウムの教科書や教材等にかかわる資料も収集した。

- 2) シビウでは、牧師で地域の歴史にも大変詳しい著名な作家、エギナルト・シュラットナー師から、第二次世界大戦前後のドイツ系ギムナジウムにおける教育について聞き取り調査をし、当時、師が使用された教科書などの資料を提供いただいた。またルーマニア・アカデミーで活躍されたグードルン・イトウ博士のご協力をいただき、シビウ市におけるシラー作品の上演史に関わる情報収集を行い、同地で、継続的にシラー作品が上演されていたことが確認できた。アウクスブルク大学附置ブコヴィナ研究所からは、ブコヴィナにおけるゲーテのみならずシラー受容に関わる情報提供も受けた。
- 3) ブコヴィナおよびトランシルヴァニアの両地域における学校教育で用いられた教科書や教材において、基本的にゲーテとシラーの両詩人はともに最大の敬意を持って取り上げられ、教科書に収録されている作品などにも大きな偏りは認められなかった。しかしトランシルヴァニアにおいては、ギムナジウムが催すイベントなど社会的影響を意識した活動の部分で、顕著なシラー崇拜がみられ、またその政治的意味も明らかになった。
- 4) 研究分担者は、トランシルヴァニアの有力ドイツ語紙『ズィーベンビュルゲン=ドイツ日刊新聞』のデジタル化されていない1905年(シラー没後100年)の紙面を調査し、シラーにかかわるすべての記事(主要記事で19編)、短報(24編)、広告などを整理して、シラー祭の全容と、シラー祭にまつわる報道にみられる言説の特徴、シラー祭におけるギムナジウム教員をはじめとする教養市民層の活動、シラー祭を頂点とするシラー崇拜の政治的意味を整理した。分析によると、1905年の没後100年にあたり、数多くの新聞記事が刊行され、それらの記事を通して意識的に1859年にシラー生誕100年祭が盛大に挙行された記録が呼び起こされた。研究分担者は、1859年のシラー生誕100年の祝祭がドイツ国内のみならず、北米や他地域のドイツ系マイノリティにより集合的アイデンティティ形成のために盛大に祝われ、利用されたとの先行研究を踏まえ、トランシルヴァニアの各都市や地域におけるシラー祭をめぐるメディア報道に、1867年のアウスグライヒ(妥協)によりハンガリー領となりハンガリー化政策の圧力下におかれたトランシルヴァニアのドイツ系住民に対し、オーストリア=ハンガリー二重帝国の枠を超えてドイツ帝国との民族的一体性を示そうとする政治的意図を読み取った。小ドイツ主義的なドイツ本国とのアイデンティティ一体化の試みは、1933年以降のナチズム受容を必然とする精神的かつ社会的土壌を生み出したと考えられる。今後は1934年の生誕175年祭などについても分析と考察を広げる予定である。
- 5) 研究代表者は、ブコヴィナのギムナジウムにおけるドイツ語授業の教材等を確認する一方、ユダヤ系ドイツ語詩人たちの未刊行だった原稿や書簡のうち、印刷に付されるようになったもの入手し内容を確認した。ただし、ルーマニア独文学会の学会誌で刊行されたものなど、一般には入手が難しいものもあり、それらはルーマニアの研究者の協力を得たことで可能となった。また両次大戦間期にブコヴィナの首都チェルノヴィツで刊行された彼らの初期の詩集を、その序文なども含めて改めて分析した。
- 6) 研究代表者は、第二次世界大戦中のルーマニア軍およびドイツ親衛隊によるユダヤ人強制移送と殺戮、強制労働などを経たユダヤ系ドイツ語詩人たちのドイツ語文学の捉え方およびドイツ語文学と彼らのアイデンティティの関係について、パウル・ツェランの初期代表作「死のフーガ」(1947)および同作品と共通のモチーフや表現が見出される同郷の詩人たち、とくにモーゼス・ローゼンクランツとイマヌエル・ヴァイスグラスの作品とを比較分析し、ドイツ語文学の代表者としてのゲーテ、そしてドイツ音楽の代表者としてのヨハン・ゼバスティアン・バッハとの距離に注目し、再整理した。
- 7) また、両次大戦間期にブコヴィナ・ドイツ語文壇の中心的存在であった3名の詩人アルフレート・マルグル=シュペルバー、アルフレート・キットナー、ローゼンクランツに着目し、回顧録や新たに刊行された書簡集などを踏まえて、彼らが両次大戦間期から第二次世界大戦中のユダヤ人迫害を経て大戦後の社会主義体制下での抑圧を経験するなかでも、一貫してゲーテを文学の規範とし続け、また自らを、ゲーテを中心に形成され、宇宙的な諸力と過去から未来にかけての果てしない時間を背負う、ドイツ文学の正統な系譜に連なる者として理解しようとしていたことを明らかにした。この研究成果は2018年10月に東京大学本郷キャンパスで開催されたシンポジウム「東欧文学の多言語的トポス：複数言語使用地域の創作をめぐる求心力と遠心力」において発表した。当初の予定では、2018年度中

に書籍に収録されて刊行される予定であったが、出版社の事情で延期された。同書は2019年度中に刊行される予定である。

8)なおこの他、2016年には、ルーマニア・ドイツ語文学および同文学研究の状況を確認する作業を行い、2編の論文を執筆している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

鈴木道男「トランシルヴァニアのシラー祭 - 1859年の生誕100年祭・1905年の没後100年祭を中心に - 」、『国際文化研究科論集』(東北大学大学院国際文化研究科) 査読有、第26号、2018年、29-42頁。

藤田恭子「ルーマニアにおけるドイツ語学文学研究の現在を読む - ルーマニア独文学会会長 ジョルジュ・グツ教授の古稀記念論集刊行に寄せて - 」、『東北ドイツ文学研究』(東北ドイツ文学会) 査読無、第57号、2016年、123-130頁。

藤田恭子「ルーマニアにおける国家保安部(セクリチア)記録文書公開 - ヘルタ・ミュラーが見る『過去の克服』の現実 - 」、『東北ドイツ文学研究』(東北ドイツ文学会) 査読無、第57号、2016年、105-117頁。

〔学会発表〕(計2件)

藤田恭子「《周縁》と《カノン》 - ルーマニア領ブコヴィナのユダヤ系ドイツ語詩人たちとゲーテ - 」、『シンポジウム『東欧文学の多言語的トポス:複数言語使用地域の創作をめぐる求心力と遠心力』、科研費・基盤研究(B)「東欧文学の多言語的トポスをめぐる研究」(H27-H30、代表者:井上暁子)主催:東京大学人文社会系研究科現代文芸論研究室共催(招待講演)、2018年。

藤田恭子「ブコヴィナのユダヤ系詩人たちにおけるゲーテとバッハ - ツェラン『死のフーガ』とその周辺を手掛かりに - 」、『上智大学ドイツ文学会(招待講演)、2016年。

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名:鈴木 道男

ローマ字氏名:SUZUKI MICHIO

所属研究機関名:東北大学

部局名:大学院国際文化研究科

職名:教授

研究者番号(8桁):20187769